第 363 回「言葉の院外処方箋」

新渡戸稲造記念センター 長 樋野興夫

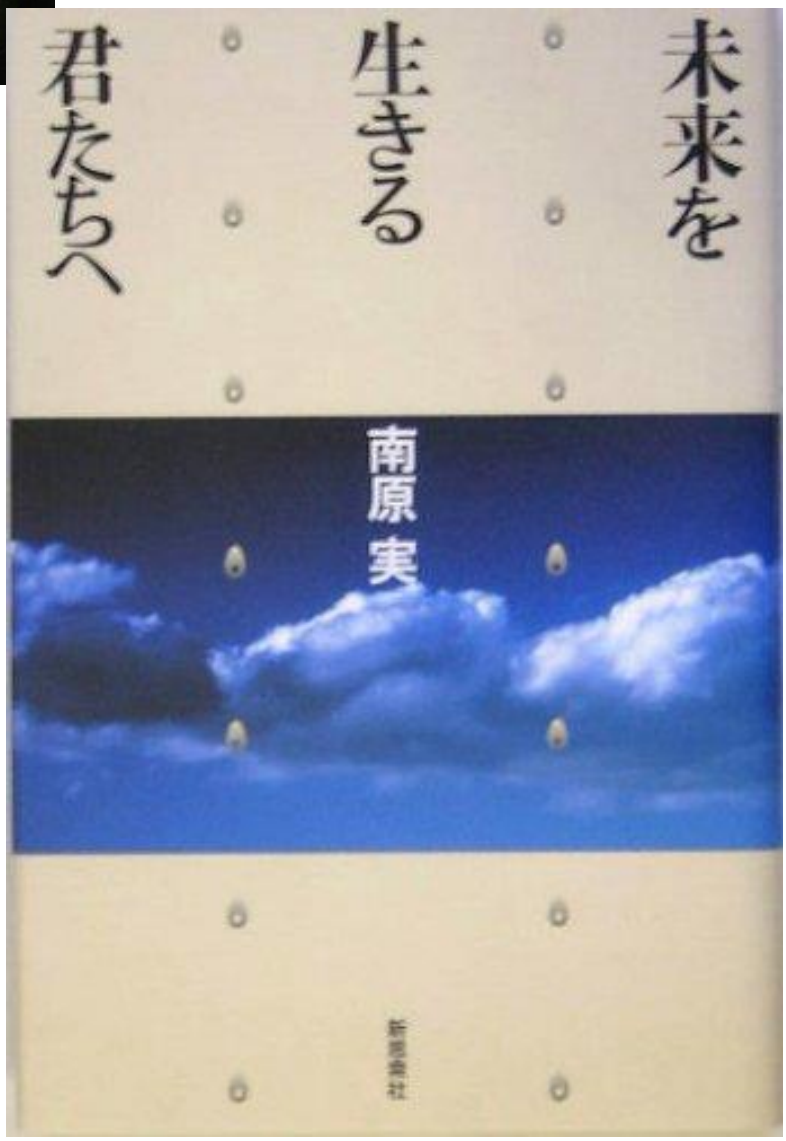
『見識が広く ＆ 高い』 ～ 『未来に生きるゼミナール』 ～

2025 年 11 月 3 日(文化の日)【第 22 回南原繁(1889-1974)シンポジウム『敗戦後 80 年、戦後日本の歴史を見つめ直す』】(日本教育会館に於いて)に赴いた。 筆者は、2004 年にスタートした南原繁研究会【初代代表鴨下重彦先生（1934 年-2011 年、東京大学名誉教授、国立国際医療センター名誉総長）、第 2 代代表加藤節先生(成蹊大学名誉教授)】の 3 代目の代表を 2019 年『南原繁生誕 130 周年』に仰せつかった。 南原繁研究会代表として【開会あいさつ】の機会が与えられた。 筆者は、南原繁が東大総長時代(1945-1951)の法学部と医学部の学生であった二人の恩師から、【南原繁の風貌、人となり】を伺ったものである。 第一部『基調講演』は、磯前順一先生（国際日本文化研究センター教授）。第二部『パネル・ディスカッション』では、南原繁研究会の会員である三名のパネリスト 山口周三氏/ 村松晋氏/ 塩川礼佳氏であった。大変勉強になった。日々勉強である。

【南原繁のご長男で『青樹築一』の名で、アメリカの海洋生物学者：レイチェル・カーソ(Rachel Carson 1907-1964)の『沈黙の春（Silent Spring）』(1962 年)を翻訳された(1974 年) 南原実先生(1930 年 11 月 12 日～2013 年 11 月 12 日)（東京大学教養学部 名誉教授）との出会いは、『南原繁没 30 周年記念事業』でスタートした『南原繁研究会』(2004 年)以来、毎年、wife と一緒にお逢いして、夕食をしながら、親しい深い学びの時が与えられた。 『見識が広く』＆『見識の高い方』であり、まさに、筆者にとっては『未来に生きる君たちに』（南原実著）の貴重な得難い『人生の特別ゼミナール』の時間】(画像)が鮮明に思い出された。

『沈黙の春』の最終章『べつの道』の【『私たちは、いまや分れ道にいる。』＆『どちらの道をとるか、きめなければならないのは私たちなのだ。』】は、『がん哲学外来の原点』にもなった。 懇親会の後、南原繁のお孫様の南原務氏が、運転で送って頂いた。 車内での奥様の南原香氏の【心温まる、ニューモア溢れる『お話』】は大爆笑であった。 大変有意義な『車の旅』となった。

11 月 4 日は、2009 年に福島県立医科大学で開設された『吉田富三記念 がん哲学外来』に赴く。


未来を
生きる
君たちへ
南原 実
新潟日報社